

## 活動報告

教師のための

### 難民問題ワークショップ 難民問題をどう教えるか

(共催：開発教育協会( DEAR )、日本国連 HCR 協会、後援：外務省、渋谷区教育委員会)

2003年3月28日、UNハウス(国連大学ビル)において、「教師のための難民問題ワークショップ 難民問題をどう教えるか」が開かれました。このワークショップは、教師やNGO(非政府組織)の職員が、開発教育の参加型の手法を通して、より体験的に深く子どもたちにこの問題について教えられるよう、「開発教育協会」の協力を得て UNHCR が企画したものです。

講師には丸山まり子氏(奈良県安堵小学校教師、開発教育研究会メンバー)を招き、小学生用教材を使ってワークを行いました。北海道から南は兵庫県まで39名が参加。

#### ワークショップのながれ

このワークショップは7つのセッションで構成され、それぞれのテーマは「難民とは」、「逃げる」、「難民キャンプの暮らし」、「生きる希望」、「どこに向かっているのでしょうか? 日本? どんなことに困るのでしょうか」(わたしたちができること)、「日本国内の難民状況」です。体験的なワークを通して参加した人は、「難民」の気持ちや置かれている環境を疑似体験しました。また、日本で難民認定を受けたアフガン難民の方から、日本での実体験を聞き、「心の痛む内容だった」、「日本の実情がリアルにわかった」などの声が参加者からあがりました。



開会の挨拶を述べる田中治彦 DEAR(開発教育協会代表理事、左)と浅羽俊一郎 UNHCR 東京事務所副代表。



北は北海道から、南は関西圏まで計 39 人が参加。最初の「緊張をほぐす」セッションでは、丸山まり子講師の質問に応える形で参加者がグループを作った。



グループ内で自己紹介をする参加者たち。参加者の教師、NGO 職員そして研究者としての多様な知識と経験は、ワークショップでの取組みを一層実り豊かなものとした。



講師の丸山まり子さん



セッション2「逃げる」でのワーク。戦争が起こり家族で逃げなければならなくなった時に何を持って行くか？話し合う参加者たち。



話し合い（写真左）の結果、かばんに詰め込んだ持ち物



セッション3 “難民の暮らし”を写した1枚の写真から、「何が読み取れるかを考える参加者たち。」



セッション4：スーダン難民の子どもの描いた絵がデザインに採用されたエルメスのスカーフ。なかなか将来の夢が持てない難民の子どもたちの中では、希望の持てた数少ない例。このセッションでは、難民の子どもたちについて学んだ。



セッション6：自らの体験を語る、日本で難民認定を受けたアフガン難民のハジ・ヒサルフセインさん。「仕事や勉強ができると思い希望に溢れていたが、認定後も政府からの支援がなく、現実は厳しいです」



最後の質疑応答の中で、感想を述べる参加者  
認定を受けた難民の方が「日本政府は、まず自分（難民）  
よりも国内のホームレスを助けるべきである」と話していた  
が、難民やホームレスといった個別の問題ではなく、根底  
に日本の福祉や社会のモラルの問題があると思う。日本  
社会が少し恥ずかしいと思った。

\*丸山まり子さん - UNHCR と協力して出版された難民問題の教材集「新しい開発教育のすすめ方 II - 難民」  
（開発教育研究会編、古今出版刊、2000年）の著者の一人。

#### ワークショップの参加者から

先生からは学校の授業の中で、NGO 職員からは子ども達の訪問を受けて、子ども達とワークに取り組んでみたという報告が少しづつ寄せられています。また、今後、道徳や総合学習の時間の中で、難民問題についての学びを計画中という声もあります。今回、好評であったことを受けて「開発教育協会」と UNHCR では、今後もワークショップを開催して行く予定です。開催のお知らせは、このホームページ上で行いますので、どうぞご参加ください。